

第3章 海外展開するマンガ単行本(手塚治虫編)

海外における日本マンガ出版状況調査・ディレクター

幸森 軍也

1. はじめに

マスコミ報道などによると日本のマンガは世界中で受け入れられ、世界中で販売されているかのように聞こえる。マンガは日本を紹介する重要な文化であり、国をあげて海外へ売り込んでいるようにも思える。本当だろうか。

いったい何カ国で、誰の、どんな作品が、どれくらいの部数で発売されているのか。この件に関してどこに問い合わせれば正確な数字を答えてくれるのか。総務省統計局か、経済産業省か、外務省か、文化庁か、社団法人日本漫画家協会か。いずれも正確な情報は持っていないようである。国立国会図書館は日本国内で発行された書籍について納本義務はあるものの、海外で発行された日本作家の(翻訳)作品については原則として収集していない。

すなわち、海外で発売されたマンガに関して総合的な資料やデータを収集、管理している組織は政府関連も民間でも一切ないのである。では、どのような根拠でマンガが世界に広がっているといい出したのか。

ただ、多くの誤解を生んでいる原因の一つに、マンガとアニメの混同がある。国産のテレビアニメで海外に販売した実績は手塚治虫の「鉄腕アトム」が嚆矢である。アメリカのNBCフィルムズへ1963年に放送権を販売した(アメリカ版タイトルは「Astro Boy」)。以降しばらくの間、国産テレビアニメは海外番組販売をすることを視野に入れて製作されていった。(参照1)¹テレビアニメ「鉄腕アトム」は「放送権」の販売だったが、テレビアニメ「エイトマン」以降多くの国産テレビアニメは「著作権(音楽著作権を含む)」も含めて海外販売した。このため日本産テレビアニメを購入した海外の放送会社はそれを他国へ転売することもでき、世界中に広まっていった。社団法人日本動画協会が公表している「日本のアニメの海外展開(2013年版)」によると契約国は34ヶ国、契約数は約900本である。そういう意味では本来はアニメの世界的広がりも同時に見ていかなければならないだろう。

しかしながらアニメとマンガは別物である。

マンガ作品、マンガ単行本に焦点を当てて調べたとき、前述のように総合的な資料がどこにもないことがわかってくる。マンガの評価が世界的にどうであれ、基礎となる総合的な資料は必要であろう。マンガが世界でどのように発売されているのか調べる意義はまちがいになくある。

¹ 参照1：『「商品化権」という言葉が生まれた頃』座談会「マーチャンダイジングライセンスレポート」No.224 掲載(1979年4月)

2. 許諾手順

海外で出版される日本の翻訳マンガについては、次の三つのカテゴリーに分類することができる。

(1)正式許諾作品

(2)非正規作品

(3)海賊版

日本のマンガ作品が海外に正式に紹介されはじめたのは例外を除きたい1990年以降のことである。つまり、これ以前は海賊版しかほぼ流通していなかったことになる。

その中間存在として(2)非正規作品と分類できるものがある。例えば台湾は日本と国交はないけれども、著作者の許諾を得て出版している。このような場合を非正規作品という。出版の時期、形態など契約書も締結されていることから、正式許諾に準ずる出版物と考えてよいだろう。

(3)海賊版については違法出版物であり、頒布の実態を掴むことは到底不可能なため論外とする。

日本側の海外出版に対応できる出版社等の各種窓口が整ってきたのが1994年ころであり、それ以前は海外からの問い合わせに対して放置していた(講談社にはこれ以前に交渉窓口があった)。すなわち海外の出版社が正式に許諾を求めてきても日本側で許諾をだす仕組みがなかったため、やむを得ず海賊版を出版するしかなかった事情がある。また海賊版は違法ながらも、その地域にそのマンガ作品の市場がある指標になるとも付記しておく。

上記(1)(2)のマンガ単行本を海外に翻訳出版許諾をする場合、おおむね次のような手順となる。

(i) 海外出版社(もしくはエージェント)から当該マンガ単行本発行の出版社(又は著作権者)へ許諾申し込み。

(ii) 販売価格、発行部数、印税率等の条件確認。申し込み出版社の信用調査と最低保証金額(ミニマムギャランティ=MG)の確認。印税率はおおむね6から8パーセント。ただし信用調査といっても噂話程度の聞き取り。

(iii) 出版社が受理した場合は、著作権者へ通知と諾否の確認。

(iv)申し込み出版社へ許諾(契約)

MGの入金確認と当該単行本の送付。

(v)見本品の受理。

本来は(iv)の(v)間に翻訳内容の確認や本文やカバーの刷り見本の確認作業などがあるべきだろうが、実際にはほとんど行われない。その理由は許諾した言語が判読できない場合が多いからである。現在ではカバーデザインくらいはインターネット経由で確認できるかもしれないけれども、特に日本国内で現在刊行中の単行本はそもそも独自のデザインをする例は多くなくタイトルを翻訳しただけで日本の単行本と同様のデザインのまま発行される(手塚

作品は独自デザインが比較的多いが)。稀に許諾した国の表現規制(性的、残虐)により表紙や本文に修正がなされることもある。

3. トラブルと実態

こうしてみると手続きは意外と簡単そうだ。ところがやはり国内の出版社と異なり、海外の出版社特有のトラブルも発生する。

契約関係では、法務案件で交渉が破談になる場合。申し込みの取り下げもある。許諾した政府の体制が変わり検閲強化で破談や前述したように修正が発生することもある。修正費用を誰が負担するのかも問題だし、著者が亡くなっていると修正できないこともある。

現場レベルでは、素材の発注まちがいや、先方の編集責任者の突然の転職や辞任。乱丁や承認ミスによる回収と断裁などもある。さらには出版社自体の廃業、合併も日本より起こる。

無事に出版に漕ぎつけたあとにも、印税報告が根本的に正確でない可能性があるし、増刷の報告がないこともある。

このようなトラブルは国内の出版社でも起こりうる案件ではあるけれども言葉が通じない点、距離がある点、国家体制が異なる点、出版の実態がわからない点は不安材料といえる。なによりトラブルが発生し相手方と交渉しても解消しないときは訴訟になるわけだが、著者側が勝訴するとしても国際裁判に発展するのを避ける、もしくは訴訟費用に相当するほどの回収収益に到らない場合が多い。翻訳マンガ出版は少部数であって、翻訳マンガは少部数であって、価格を安く抑えようとするとも利益率が低くなり、日本のように莫大な利益を産みださない。

「出版月報」2012年8月号は、特集で「ライツビジネスのいま 出版コンテンツの海外展開」と題して、マンガの翻訳出版にも触れている。これによると日本マンガの書籍・雑誌を含めた海外市場は1380億円(現地価格)で、日本にはいる収入はその8%の110億円となる。内訳はマンガ単行本が84億円、書籍14億円、雑誌13億円くらい。これも2008年をピークに減少傾向にあると書かれている。その原因は地上波アニメが減少し若年層への告知が行き届かない、マンガ出版社や書店の撤退をあげている。また強力なタイトルがなくなってきたのも後退に拍車をかけた。日本国内だけでマンガ(雑誌を含む)の総売上高は約4800億円であり、全世界を対象としたとき海外の売上が日本国内の数倍であっても不思議はないのに、実際は3割にも達していない。全世界を対象と考えると、いかにも少ない。しかも現在もアニメ放映に依存した発行で、マンガ作品単独の力で売れたわけではなさそうだ。しかし、メディアミックスの観点ではマンガ販売がアニメと連動するのは国内も同じではあるものの、海外のようにアニメ放送本数の減少がたちまちマンガ単行本全体の売上に大きく影響することはないと思われる。

前掲の「出版月報」にはタトル・モリエージェンシーの荻野千草氏がコメントを寄せており「『ハリー・ポッター』は世界の67言語で約4億冊が販売されています。一方日本を代表する作品であっても24言語ほどが限界。出版部門もあるディズニー社は常時80ヶ国に

ライセンスしています」とある。すなわち日本のマンガには世界戦略などまったくなく、日本人々が思うほど売れていないことになる。

許諾の手順で示したように、ほとんどの場合が海外の出版社からの申し込みを待っているだけの状態で、自ら戦略を持って売り込みをしている例はあまりないのが実情である。日本でどのようなマンガ作品が発行されているかを他国の出版社やエージェントに知らせる手だても講じられていない。

4. 手塚治虫作品の調査

日本のマンガは世界的な広がりを見せているといわれている。むしろ日本国内にもアメコミやバンド・デシネなど海外から同様の作品は輸入紹介されているものの、文学作品やSFの翻訳小説のように駅前にある近隣の書店で気楽に手に取れる状況にはない。翻訳された日本のマンガは海外の書店で、日本における海外の一般書籍と同じように容易に手に取れるくらい広まっているのだろうか。国によってまちまちと思われるが、どのような売られ方をしているのかは現地に行かなければさすがに調査できない。

日本のマンガ作品は世界的に見てかなり特殊な創作物である。

それは手塚治虫によって開発されたストーリーマンガという表現形式がきわめて優れており、かつ手塚が構築した物語が従来の漫画の枠を越えて多種多様だったからである。日本のマンガの多様性は直接的には手塚のストーリーマンガによるものといってまちがいない。少年マンガ、少女マンガ、青年向け、成年向け、成人向け、レディースコミック、幼年マンガなど性別、年代別に分けられる。ジャンルを見るとSF、ホラー、ファンタジー、歴史、スポーツ、ゲーム、医療、四コマ、食、職、ギャグ、学園ドラマ、ロボットなどあげはじめれば際限がない。2010年代にはマンガ雑誌の銘柄数は年間約300種、約5億部。マンガ単行本は年間13000作品、約4億部。全出版物の中でマンガは25パーセント程度を占め、4800億円を稼ぎだしている。膨大な生産量といえよう。これほどまでに生活にマンガが溶け込んでいる国は世界に類がない。

この豊饒なる作品数の背景があつてこそ、世界のどの地域のどの年代に対しても日本のマンガが受け入れられる可能性を秘めているのである。

当の手塚治虫の作品が海外に進出していった経緯は、御多分に漏れず海賊版である。しかし、1981年以降は中国をはじめフランス、インドネシア、イタリアへと正式許諾して発売されている。

今回は2013年末時点で流通されている作品を株式会社手塚プロダクションの協力と許諾を得て調査した。このリスト(以下「本リスト」という)以外に絶版(過去に発売されて現在は流通していない単行本)は数千冊ある。

5. 調査の方法とリスト作成

調査の方法及びリスト作成の方法は、手塚プロダクションが管理作成している契約をベ-

スとした許諾作品リストをもとに原本との突合を行った。

前述したように契約は交わしたものの、出版者側の事情で発行に到らなかった場合など、契約と実際の刊行物には差異があり、また発行年月日など不明な項目もあるため、発刊され、かつ現物が手塚プロダクションに存在する単行本(現在流通しているものとほぼ合致すること)を対象とし、奥付けを参照してリストを作成した。逆に単行本だけがあっても、それが許諾版なのか海賊版なのかは現物を見ても判断できない。コピーライト表示があったとしても、海賊版はコピーライト表示まで写すからである。

ただし国によっては単行本にも発行年月日が記載されていない場合もある。日本は明治二年に制定された出版条例以降、出版者名や住所、発行年月日等が奥付に記載されるようになったが、他国にこの例が必ずしもあてはまらない。

I S B N(International Standard Book Number=国際標準図書番号)は全世界的に書籍に単一のコードをつけており識別性が高いはずだが、これも国によって利用状況はまちまちだし、そもそも I S B N が付されていない国もあった。

国内で発行されたどの単行本が元となって海外展開したかの明確化のため、相当する単行本を記載した。ただこれも厳密には日本の元本と完全に一致しない場合もある。短編集や「ブラック・ジャック」のような連作短編については一話分が削除されたり、収録の順番が入れ替わったりしている場合があるからだ。

リストの一行は原則として一冊とした。つまり全5巻の作品ならひとつのタイトルで五行あることになる。

作品名は邦題と翻訳国のタイトルと両方を記載した。そして翻訳出版社名と発行年月日を付けた。

判型やページ数、定価、部数なども書籍情報としては欲しいところだが、判型に関しては国によってまちまちで新書版、B5判などといった定型がないことも考慮すると何センチ×何センチとなりわかりづらいため省いた。定価もその国内事情がわからないと高いのか安いのかの基準が示せない。ただ部分的にはあるが、国別の解析のところで価格については触れておいた。発行部数に関しては記録にはあるものの個別に公表できる性質のものではない。これらについては今後の課題としたい。

6. 解析――概況

まずは全体的な数字から解析する。

Comic や Cartoon ではなく MANGA でも世界的に通じるようになったといわれ、表紙にそのように表記された単行本もあるにはあるが、本リスト上の手塚作品にはあまり見当たらない。せいぜいが GRAPHIC NOVEL と書かれてあるか、何の表記もない。

発行年月日を見ると本リストで最も古いのが 1996 年となっており、この時から増刷を繰り返し契約更新をしていることがわかる。人気作は息長く売り続けられるのはどの国も同じである。

許諾国数は 18 カ国、言語数で 17 言語。

発行単行本冊数の多い国別で見ると台湾、フランス、韓国、アメリカ、スペイン、イタリアの順。クロアチアとポーランドはそれぞれ一冊ずつだが、発行年は 2013 年で初取引である。

もともとアメリカではマンガ(コミック)は子供向けで数十ページの程度の薄く、駅のスタンドなどで安く売られていた。日本のように 200 ページを超える書籍として書店の棚に並ぶ国はかつては少なかった。日本のマンガが海外で発行される時は現地の販売形態にしたがって一冊を数巻に分ける例もある。あるいは日本のマンガが広まりだして以降にはそのままの形態や逆に二巻分を一冊にした合本等の厚めの書籍も増えはじめ、書店で売られる場合もでてきた。手塚作品は数十巻に及ぶ作品は少なく、タイトル数と冊数は正比例の傾向にあるが、他の著者だと数字の読みまちがいに注意が必要である。

次いでタイトル別に見ていくと全 18 ケ国中、12 カ国で発売されているのはやはり「鉄腕アトム」である。11 カ国は「ジャングル大帝」となっており、これはテレビアニメの影響で作品に馴染みがあるため手にとりやすいのだろう。いずれも初期の手塚作品で子供向けである。「鉄腕アトム」の英題は「Astro Boy」で表紙にこれを採用した国はフランス、北米、イタリア、スペインなど。他の表記になっているのは台湾の「鉄臂阿童木」や「原子小金剛(小飛侠)」、韓国、ベトナムなど少ない。

また「ジャングル大帝」は手塚が意図した英題は「Jungle Emperor」で連載時のトビラにもそう書かれていた。しかしアニメのタイトルは「Kimba the White Lion」と変わり、北米、オーストラリア、カナダ、メキシコ、スリランカ、サウジアラビア、フランス、スペイン、イラン、インドネシア、フィリピン、クロアチア、イタリアなどで放送された。ところが単行本に「Kimba」と表記された国はイタリアとドイツ。元本通りの表題を採用しているのはフランス、フィンランド、台湾、中国など。ベトナムは幼年向けと少年向けの二種類が発行され、タイトルも別になっている。とするとアニメに依存しての出版でないとも考えられる。ただ、北米では「ジャングル大帝」中の黒人の表現に配慮して現在では許諾していないため、絶版になっている。

それにしても「鉄腕アトム」は 1951 年、「ジャングル大帝」は 1950 年に連載がはじまった作品である。いずれも発表から 60 年以上経っている。海外の人々はそんなに昔の作品と理解して楽しんでいるのか、それとも現代のマンガと認識しているのか。生前に手塚が手を加えたにしろ、作品の寿命の長さは驚くべきである。

10 ケ国で発売されたのは「ブッダ」と「アドルフに告ぐ」である。この二作品は「ブッダ」が 1972 年、「アドルフに告ぐ」が 1983 年に連載開始された手塚中期の作品。感覚的にはマンガというより劇画のリアルなタッチで描かれた青年、成年向けであり、子供向けの楽しく明るい娯楽作品ではない。

「ブッダ」は 2011 年 5 月にアニメ映画化され、フランス・アヌシー国際アニメーション映画祭に出品されたが、フランスでのマンガ出版は 1998 年なので直接的には関係ない。「ブ

ッダ」が最も早く出版されたのも本リストではフランスであるが、世界的には韓国が早かった。次いでイタリアが 1999 年、スペインは 2002 年、ベルギーは 2004 年。この 4 国が地理的に隣接していることが関係しているのかもしれない。フランスでは同じ出版社(Éditions Tonkam)で 2004 年に表紙デザインを変えて再刊もした。実はフランスではさらに早く 1983 年に出版契約をしていた。

アメリカは 2003 年とヨーロッパには遅れたものの、ウィル・アイズナー漫画産業賞(The Will Eisner Comic Industry Award)を授与し評価した。その他の国は 2010 年代に入ってから発行である。

インドネシアは 2007 年発行だが、欧米諸国とは異なる動きだろう。ちなみにインドネシアは仏教国ではない。ブッダは仏教の開祖と世界的に知られており、宗教的な作品は関心が高いことが窺える。これは「きりひと讃歌」が 8 ケ国で発行されていることにつながる。

第二次世界大戦下の神戸を舞台にアドルフ・ヒトラー出生の謎をからめた「アドルフに告ぐ」は 1995 年のアメリカでの刊行が最初であった。水木しげるの「総員玉砕せよ」がアイズナー賞を受賞(2012 年)したように戦争をテーマにした作品は話題になりやすいと推測できる。発行は次いでイタリアで、フランスは 1998 年と遅めであった。

世界 9 ケ国で発行されている「ブラック・ジャック」は日本でも人気作品であり、また連作短編で読みやすく、売りやすいのだろう。手塚プロダクションの契約書でも全巻一括契約ばかりではなく巻ごとに数巻分の契約が散見できる。「ブラック・ジャック」は『週刊少年チャンピオン』に連載された『少年マンガ』ではあるものの、手塚中期の作品で絵柄的にマンガと劇画の中間的なタッチで、子供にも大人にも馴染みやすいのかもしれない。

「ブラック・ジャック」が最も早く出版されたのは東南アジアで中国語版、1981 年である。本リスト上ではフランスで 1996 年。次いでイタリアも 1996 年、シンガポールが 1997 年。北米、スペインとなる。フランス、アメリカ、台湾では 2 社から発売中である。生と死、命の値段というテーマは世界的に普遍性があるのだろう。アニメとのメディアミックスがなくとも世界を舞台にして普遍的な物語を扱っていれば、他国に受け入れられる証拠である。

8 ケ国で出版されたのが「リボンの騎士」「火の鳥」「きりひと讃歌」である。「リボンの騎士」というまでもなく少女向けストーリーマンガの嚆矢だが、世界を見まわしても少女マンガが刊行されている国は多くはない。日本の少女だけがマンガを読むわけでもないだろうから、潜在的需要はあるはずだがあまり啓蒙、供給されていないと考えられる。確かに日本マンガ史を繙いても少年向け作品に比べて女の子に対しては少女小説や挿画が多く、少女マンガの本格的発達の手塚、石ノ森章太郎、水野英子以降であった。アメリカでは「リボンの騎士」を『少女マンガ』と紹介し、マンガファンの注目を集めた。マンガは基本的には子供が、それも男の子が読むもので、これほどまでにマンガ表現が細分化しているのは日本くらいなのだ。マンガ・アニメのコスプレ大会に積極的に参加する多くの人々にも多様な日本マンガを紹介し、マンガ単行本に、より高い関心を向けさせることはできよう。

興味深いのはロシアで、手塚作品は二作品しか出版されていないのに「リボンの騎士」が

選ばれた点。もっとも手塚マンガは 2010 年代に刊行されはじめたばかりだから今後にラインナップが揃っていくのだろう。ロシアはアメリカ、ドイツなどととも少女がマンガを楽しむ環境がある。「リボンの騎士」もテレビアニメが製作されており輸出されたものの、「鉄腕アトム」ほどの知名度はなさそうである。テレビアニメの英題は「Princess Knight」であるが、このタイトルの単行本は北米以外なく「リボンの騎士」のままである。

手塚のライフワーク「火の鳥」は生命と再生をテーマに、さまざまな時代を舞台に物語が進む中・長編連作である。海外版のタイトルが示す通り火の鳥伝説は世界中にある。「Phenix, l'oiseau de feu」(フランス)、「La Fenice」(イタリア)、「Fenix」(スペイン)、「Phoenix」(英語)。「火之鳥」(台湾)、「불새」(韓国)、「อีโนโท리 윈ค펠링」(タイ)はそのまま火の鳥となっていた。

アジアに目を向けると「ぼくの孫悟空」は3カ国、妖怪ものの「どろろ」も3カ国で刊行されている点は興味深い。西遊記はアジアで知られた話で馴染みがあるのだろう。「どろろ」は戦国時代を舞台にした時代劇の側面もあるのだが、ファンタジーに見えるのだろうか。

ジャンルとして、手塚には明確にギャグマンガと呼べる作品はほぼない。したがってギャグマンガが世界的にどのような広がりを見せることができるのかは本リストからは読み取れない。けれどもアジア地域では「クレヨンしんちゃん」(臼井儀人著)が受けいれられていたり、ギャグマンガともいいきれないが「ドラえもん」(藤子・F・不二雄著)が刊行されていたりと、まったく可能性がないわけではないはずであろう。

多くの国で発刊されている作品の概況はこのくらいにして、次は国別に解析していく。

7. 解析——国別

●台湾

手塚作品で最初期から、そして点数が最も多く出版された国は台湾である。本リストでの取り扱い出版社も4社にのぼる。

本リストで確認できるタイトルは153、冊数で586冊となった。ただしここでいうタイトル数は単行本単位で計算しており、本当の意味で正確な作品数ではない。たとえば「ライオンブックス」や「手塚治虫 THE BEST」をそれぞれ1タイトルと数えたが、これらはシリーズ名というべきだろう。したがって作品が重複している場合もあるし、短編が内包されてしまっている場合もある。

本リストには含まれていないが、手塚プロダクションの資料によると1981年に中国語版「ブラック・ジャック」が全世界中で許諾された最初の手塚の海外作品である。

台湾における刊行作品の傾向としては「マアちゃんの日記帳」といった手塚のデビュー作から絶筆作品までほとんどの作品が網羅されており、映像化された作品はすべて刊行され、さらには「ブラック・ジャック画集」「ブラック・ジャック アニメブック」もでている。

台湾東販から「火の鳥」と「ブラック・ジャック」が二種類ずつ刊行されているのが目を引く。「火の鳥 復刻版」は全12巻で、もう片方は分冊され全22巻となっている。価格も

復刻版は 240 元、分冊版は 79 元である。「ブラック・ジャック」も現在刊行中の典藏版は 240 元、全 30 巻本は 79 元である。おもしろいのは、これらも「手塚治虫 THE BEST」も第 1 巻は 49 元と割引価格になっている。2 巻以降が 79 元なのである。

表紙デザインも日本の単行本のままでなく、独自に新しく作成したものが見られる。翻訳者名も表 4 もしくは奥付に明記されている。

●フランス

フランスにはもともとバンド・デシネ(Bande Dessinée=BD)という絵と物語が融合したストーリーマンガに似た創作物があつたことから、日本マンガ文化を受け入れやすかったのだろう。

BD とマンガとは、「初めての人のバンド・デシネ徹底ガイド」(原正人監修／玄光社)によると大判の左開きカラーで表現されている作品が多いが、絵の中にあるフキダシで物語が進む点、キャラクター性が強い点などはマンガと類似している。人気作では 300 万部を超える作品もあり、BD の出版社は 300 社以上あるという。

手塚作品の取り扱い出版社数も 13 社と多い。本リスト上の作品数は 50 作品となっているが、「手塚治虫 THE BEST」は短編集であり、68 の短編と「百物語」「グランドール」「新選組」の 3 中編、「フライング・ベン」の長編 1 作品が含まれている。

ラインナップ全体を見ると、手塚の最初期の描き下ろし作品「メトロポリス」や「ロストワールド」から絶筆となった「グリゴ」「ルードウィヒ・B」まで網羅されており、絵物語「ハトよ天まで」も刊行されているのは驚きである。全てを読破すれば手塚治虫のおおまかな全体像はわかるだろうし、研究するにも不足はない。実際、手塚の研究本も出版されている。伝記マンガ「手塚治虫物語」まででている。

注目すべきは「ブラック・ジャック」が Asuka Edition(現在の Kazé)と Glénat の二社から、「鉄腕アトム」も Kana と Glénat からでている点。「ブッダ」は Éditions Tonkam から二種類刊行されている。1990 年代にでた方は低年齢向けの表紙に見えるが、2000 年代のそれは落ちついた印象のデザインである。

フランスででた単行本の表紙は手塚の絵を使ってるけれども、日本のデザインをそのまま流用する例は少ない。独自のデザインをしている。Soleil Productions の単行本には MAN G A の表記が見られるが、他には Graphic Novel と書かれたものが多いようだ。

●韓国

韓国はフランスに次いで多くの作品が発刊されているけれども、半分強の 27 作品。そのほとんどが鶴山文化社である。

全体のラインナップとしてはテレビアニメ化作品は網羅しているが、タイトルは英題に準拠したものではなく原題をハングルに訳してある。すなわち「ジャングル大帝」「リボンの

騎士」を翻訳したもの。また「奇子」「きりひと讃歌」「アポロの歌」といった青年向け作品も発行されており、「奇子」の2巻、3巻だけは成人指定されている。鶴山文化社は「ブッダ」以外は「どろろ」以降「鉄腕アトム」の第一巻を『手塚治虫シリーズ』として出版している。これらシリーズは3500 ウォンである。ちなみに「ブッダ」は11000 ウォンと高めに設定してある。

表紙デザインも独自のデザインで、特に「鉄腕アトム」はCG処理されており目を引く。鶴山文化社以外は4800 ウォン、9000 ウォンの高価格である。

また奥付に翻訳者名が明記されている。

●北米(US、カナダ)

北米、主にアメリカ合衆国やカナダで刊行されているタイトル数は20 作品と多めであり、扱っている出版社は8 社である。

北米のマンガ事情については「MANGA THE COMPLETE GUIDE」(JASON THOMSON/DELREY BOOKS)に詳しく「アメリカにおけるマンガ」の項によると、次のような発展だった。

アメリカのマンガ専門店は1990 年代半ばに「ティーンエイジ・ミュータント・ニンジャ・タートルズ」によって白黒マンガブームに突如見舞われた。87 年にはFirst Comics から「子連れ狼」とViz/Eclips から「エリア88」「舞」「カムイ伝」などが出版された。Viz は小学館・集英社・小学館集英社プロダクションの子会社である。むしろこれらは正式許諾作品であり、前述した(i)～(vi)の1990 年代以降になっての許諾とは、日本の出版社が海外出版社(エージェント)との交渉窓口を設けていなかった点でやや異なる。

「鉄腕アトム(Astro Boy)」を発行するDark Horse も白黒マンガブームの流れでマンガ出版をはじめた。この流れ以前にも70 年代初期から翻訳されていないマンガは輸入小売店で売られていたという。Dark Horse の「鉄腕アトム」の表4 には「ダークホース社は英語で初めてオリジナル版の『鉄腕アトム』をアメリカで出版します」と書かれてある。値段は9.95 ドルである。

興味深いのはVertical でPeter Mendelsund といった著名なデザイナーを使って凝った表紙デザインをしている。一見、マンガ単行本には見えない装幀である。「リボンの騎士」と「どろろ」を除き、「アポロの歌」「MW」「奇子」「アドルフに告ぐ」など比較的青年向け作品をだしているためだろう。これらには「+16」の表示がある。Cadence Book も「アドルフに告ぐ」をだしているが、こちらはソフトカバー版。Vertical がUS で26.95 ドルに対して、Cadence Book は10 ドル安い16.95 ドルである。

またVertical では「アポロの歌」を全二巻本と全一巻の二種類出版しており、二巻本の方はそれぞれ10.95 ドル、全一巻は19.95 となっている。「ブラック・ジャック」や「ブッダ」もハードカバー版とソフトカバー版の二種類ある。

手塚作品には、大判のいわゆる『10 セントコミック』の体裁のものではなく、書籍(グラフ

イックノベル)として扱っているようだ。また翻訳者名は奥付に記載されている。

●ベトナム、タイ、インドネシア

ベトナムの手塚作品は Nhà Xuất bản Kim Đồng 一社であり、全 8 作品。2000 年代は手塚治虫漫画全集に準拠した装幀だが、2010 年代になってポップな独自デザインに変わった。ISBN は付されていない。

やはりアニメ化された「鉄腕アトム」「ジャングル大帝」「ふしぎなメルモ」といった子供向け作品が好まれている。

全集装幀の「ジャングル大帝」は〈ライオンキング〉と題され 8.500 ドン。一方〈ジャングル大帝レオ〉は 20000 ドンである。

タイも VIBULKIJ PUBLISHING 一社からだけで、子供向け作品だけの出版である。表紙は手塚治虫漫画全集を模したもので、定価は 25～50 バーツである。これら二国は子供がマンガを楽しんでいる景色が見えてくる。

一方インドネシアはこのリスト以前には「鉄腕アトム」が出版されていたこともあったものの、現在では「アドルフに告ぐ」「ブッダ」と青年向け作品のみ。教養のある知識層が読んでいるのかもしれない。

●ベルギー(オランダ語)

ベルギーの Boekenwereld からでている「ブッダ」「きりひと讃歌」はアメリカ Vertical のサブライセンス作品である。著作権者さえ許諾すれば英語で発行された作品は、アメリカ経由で世界的に広がっていく可能性がある。大手出版社ならばこのように他国に支社を持つ例もある。

8. おわりに

以上、今回作成したリストから気づいたところを概況、国別に補足、解析した。むろんこれら以外にも注目すべき点はたくさんあるだろうし、筆者が気づかない点もあるはずだ。また書籍現物を見なければわからない点もある。敢えて触れていない国もあるが、蛇足気味に解説をつけずともご覧いただければおわかりいただけることが多い。それぞれ本リストを参照の上、考察、研究されることを望む。

本リスト作成で、日本を代表するマンガ家であり、現代マンガの祖ともいべき手塚治虫の作品が、日本以外の国でどのように広まり、どのような人々に読まれているかが少しだけ判明したような気がする。同時に日本のマンガが世界でどのように受けいれられているかの一端も見えはじめた。

今回の海外翻訳マンガリスト(手塚治虫編)は初めての試みであり、海外で出版されている、あるいは出版された作品の極く一部でしかない。リスト上の項目も議論を重ねて決定したものの、これらが必要項目かどうかわからないし、追加すべき項目もあるかもしれない。

世界中の翻訳作品を調査するには、冒頭にも書いた通り輸出されたアニメ作品との関連も考慮に入れなければならないし、その全体像を把握するのはほぼ不可能である。また言葉の壁もある。アニメ化作品のタイトルがマンガにつけられているのか、違うのか各国語を正確に理解している必要があるだろう。とても一人でできる作業ではない。それぞれの国の人々の協力も必要となってくる。さらには現代ではインターネット上のデジタル海賊版もある。もちろん違法な海賊版であるし、ネットのため時々刻々と状況が変化し実態を掴みようがない。それでも日本のマンガは世界のさまざまな国のサーバーにアップロードされて、閲覧されている。違法でも広がり広がりである。

これまで官民ともにこのようなリストが公表されておらず、日本のマンガがどれほど海外に広まっているかも誰もわからなかった。本リストだけを参照にしたのではあまりに部分的にすぎるけれども、国別にどのような作品が好まれる傾向にあるのかの分析、そして海外にマンガを売り込むための資料の端緒にようやくつけたのである。日本のマンガを海外に紹介する基礎資料にもなろう。またマンガを研究する人にも役立つと幸いである。

繰り返しになるが、海外で販売された、発行されているマンガ単行本はまだたくさんある。単行本以外にも雑誌や絵本もあれば、一部掲載された作品もある。すべてを網羅することは困難かもしれないが、今後この分野を研究する人に委ね、より完成度の高い翻訳マンガの調査を進めてもらいたいものである。

以上

本報告書は、文化庁の委託業務として、森ビル株式会社が実施した平成25年度「メディア芸術情報拠点・コンソーシアム構築事業」の成果をとりまとめたものであり、第三者による著作物が含まれています。
転載複製等に関する問い合わせは、文化庁にご連絡ください。